

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

国立民族学博物館をクラブ「かるちゃんぷる」の活動に活かす

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 織田, 雪江 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001645

国立民族学博物館をクラブ「かるちゃんぶる」の活動に活かす

織田 雪江
同志社中学校

はじめに

- 1 「かるちゃんぶる部」について
- 2 巡回展や特別展の見学から学園祭へ
 - 2.1 「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人—」
 - 2.2 「2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔のくらし—」
 - 2.3 「西アフリカ おはなし村」
 - 2.4 「多みんぞくニホン—在日外国人の

くらし—

- 3 民博での学びが発展したときの条件
 - 3.1 展示について予習できたとき
 - 3.2 展示そのものを楽しんだとき
 - 3.3 自分たちの展示を自由につくるとき
 - 3.4 展示後の評価があったとき
 - 3.5 社会に学びの場をみつけたとき

おわりに

*キーワード：開発教育、クラブ活動、学園祭、NGO、みんぱく

はじめに

2001年度の「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人—」を見学して以来、国立民族学博物館をクラブ活動や授業など教育現場で積極的に活用するようになった。その中から、ここでは同志社中学校かるちゃんぶる部の生徒たちとともに特別展や巡回展を訪れ、時には常設展にも足を伸ばし、そこで学んだことを発展させていった過程についてまとめる。

1 「かるちゃんぶる部」について

「かるちゃんぶる」というのは「かるチャー（文化）」と「ちゃんぶる（混ぜ合わせ）」を合わせた造語である。2000年度に、同志社中学校の文化系クラブのひとつとして立ち上げたクラブの名前である。そもそもこの名前は、関西NGO協議会が開いている自主講座NGO大学¹⁾のグループワークでつくった模擬NGOに由来する。月に1度、半年間にわたる1泊2日の講座のあと、共通の関心を持つ人が集まって自分たちでNGOをつくり活動した。その活動は第12期NGO大学の終了とともに終わったが、みんなで考えたこの名前は新しくつくるクラブの趣旨にもぴったりで、そのまま引き継いだ。

かるちゃんぶる部をつくるきっかけは、1998年度に中学1年生8クラスで取り組んだ学園祭だった。「1本のバナナから」というテーマで生徒たちとともにいろいろ調べ

ていくうちに、NGOの活動を知り、開発教育と出会う。そして開発教育はそれまで自分の関心のあった事柄に理論的な支柱を与え、自分が何のために、またどんな生徒に育てたくて教えるのかを明瞭にしてくれた。今でも、京都の関西セミナーハウスで行われている開発教育セミナー²⁾の参加を中心に、学びを続けている。

開発教育を、「誰にとっても住みやすい社会を実現するために、自分で考え行動する人を育てる教育活動」と定義づけるなら、授業の中での実践では、「知る」ことで終わってしまいがちで、「行動する」ことにつなげにくい。しかし、クラブ活動なら生徒と一緒に行動できるのではないかと考えたことが、クラブ立ち上げの動機だった。

かるちゃんぶる部の活動には大きな2つの柱がある。多文化共生社会を実現するために、ひとつは多様な文化を知る活動、もうひとつは国際NGOや地元NGOへの協力といったボランティア活動である。国立民族学博物館は、これまで前者の活動において役立ってきた。

2 巡回展や特別展の見学から学園祭へ

クラブ活動では少なくとも月に1・2回、週末に課外活動を行ってきた。本来の課外活動は日常のクラブ活動を補うものだが、かるちゃんぶる部では課外活動がメインで、その準備やまとめのために日常の活動があるといってもいい。課外活動の様子は、年度末に発行するクラブ誌『かるちゃんぶる部のあゆみ』にまとめている。

課外活動のひとつとして、これまでに以下の5つの巡回展や特別展を見学した。

「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人—」

(2001年4月19日～8月28日)

「ラッコとガラス玉—北太平洋の先住民交易—」

(2002年3月21日～7月16日)

「2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔のくらし—」

(2002年10月3日～2003年1月14日)

「西アフリカ おはなし村」

(2003年7月24日～11月25日)

「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし—」

(2004年3月25日～6月15日)

見学後に、どのように発展していったかはそれぞれ異なるが、多くは年に一度の学園祭のクラブ展での発表につながった。同志社中学では毎年三日間の学園祭の最終日に、文化系の各クラブが教室での展示発表をする。かるちゃんぶる部では、毎年ひとつの地域に焦点をあて「Let's go to ～」シリーズとして発表してきた。これまでの展示テーマは2000年「Let's go to Korea」、2001年「Let's go to Hawaii ～ハワイのローカル文化とハワイアン文化～」、2002年「Let's go to Korea」、2003年「Let's go to Africa」、2004年

「Let's go to Brazil」だった。以下では、それぞれの企画展や巡回展から学園祭までの学びの過程を紹介する。

2.1 「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人—」

私自身、国立民族学博物館は学生の頃から好きで、特別展の度によく通ったが、生徒とともに利用することは当初考えていなかった。特別展の多くの展示物はガラス越しに見る印象があったし、常設展も全巻そろった「百科事典」みたいなもので、それをただ順に読んでいくことを生徒が楽しむとは考えにくかった。そんな私の考えを大きく変えたのが全米日系人博物館の巡回展「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人—」だった。

展示前の説明会へ参加した時から、この巡回展への期待は大きかったが、私たちの二度にわたる見学を、博物館のスタッフが積極的にサポートしてくれたことは期待以上だった（写真1・2）。学習を進める中で、自分たちの展示は先住民にも注目したいと考えた時、常設展のハレ・クーアイ（ハワイ人の生協のお店を再現した展示）などもとても役に立った。そして2001年の学園祭で「Let's go to Hawaii ~ハワイのローカル文化とハワイアン文化~」として結実した。この展示は、その後2002年10月の新潟県立歴史博物館での巡回展の開催に合わせて再び発表する機会を得て、理想的ともいえる学びの過程があった（写真3・4）。発表に至るまでの過程は『月刊ミュゼ56号』（織田2003）にまとめたので、読んでいただけたらと思う。また国立民族学博物館調査報告26『日米共催の展示における学習プログラムとボランティア活動』（中牧編 2002）には博物館スタッフの立場から私たちの取り組みの様子がまとめられている。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真1 「はなはなウェア」を試着し吉荒さんから解説を受ける

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真2 吉荒さんからハワイの日系人のガレージ展示の解説を受ける

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真3 新潟県立歴史博物館に再現された学園祭の展示 1

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真4 新潟県立歴史博物館に再現された学園祭の展示 2

2.2 「2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔のくらし—」

李さん一家の持ち物すべてが展示された特別展は、先述した巡回展と合わせて、私がそれまで持っていたガラス越しに展示物をみるというイメージを完全に取り払うことになった。この時も自分たちの展示作成を意識して4月と7月の二回にわたって特別展を見学している。生徒は展示自体をととても楽しんで、円卓の周りに座って韓国語に翻訳された漫画を読んだり、ハンゲル講座の教室に参加するなどしていた（写真5）。また博物館の地下に設けられた屋台風のお店も安く食事ができて生徒には好評だった（写真6）。4月に特別展を見学した後、6月までの2ヶ月間は週に一度韓国からの留学生を講師にハンゲル講座を持ったり、6月の課外活動ではコリアタウンや鶴橋高麗市場を訪ねたりした。

そして2002年9月の学園祭「Let's go to Korea」の展示は、これまで韓国などで買い集めてきたものの他に、貸し出してもらった「みんぱっく」に入ったモノの数々が彩りをそえた（写真7・8）。スーツケースの中からひとつずつモノを取り出して、解説カードを読み、展示していく作業そのものが学びの過程だった。「みんぱっく」にセットされた韓国の子どもの一日を捉えたビデオも学園祭当日に何度も見るようになった。

私たちの展示で、「みんぱっく」の存在を知ることになった保護者で、小学校教員をしていた方は、その後「みんぱっく」の貸し出しを申し込んだそう。またインターネットで他の「みんぱっく」についても見るできるので、インドに滞在した時に、生徒と同年齢の子どもが日常で使用するモノを集めて教材にするというふうに、私自身も「みんぱっく」の発想を参考にすることができた。

Rights were not granted to include
this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

写真5 特別展に設けられたハンゲル講座に参加

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真6 特別展に出店されたお店でランチを楽しむ

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真7 「みんぱっく」を利用した学園祭の展示 1

Rights were not granted to include
this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

写真8 「みんぱく」を利用した学園祭の展示 2

2.3 「西アフリカ おはなし村」

この特別展までに、日本フォスタープラン20周年記念事業への協力を通して、既にアフリカへの関心をもっていた。3月に東京のフォスタープランのスタッフと京都フォスター・ペアレント会の人たちが同志社中学を訪れ、ケニアの子どもたちが考える問題点と夢を、こいのぼりに描かれた絵から読み取るワークショップを行った。その後、数週間にわたって、日本の問題点や夢を出し合ってフォスタープランが準備してくれた白地のこいのぼりの両面に描いた(写真9)。世界各地でこのように描かれたこいのぼり100匹余りが東京に掲揚されるとともに、5月にはこいのぼり作成に関わったケニアの男子と女の子がひとりずつ日本に招かれ、同志社中学の生徒たちとパネルディスカッションが持たれた。その時の成果は『開発教育NO.49』³⁾に詳しい。

さらにアフリカを知りたいという思いで7月に特別展を見学し、生徒たちは民族衣装を試着したり(写真10) 打楽器などの体験を楽しんだ(写真11)。そして2003年の学園祭「Let's go to Africa」はこいのぼりの展示を中心にできあがった(写真12)。

この特別展に合わせて、太鼓や雑穀のワークショップが連続で企画されていたことにも関心をもっていた。しかし連続で参加するには、距離的に遠いので、例えば雑穀の種を購入して学校の花壇などで育て「年貢」を納め、料理にするイベントにはみんなで参加できるなど、地元でなくても取り組めるチャンスがあればと思った。また、フォスタープランのスタッフが、ケニアの子どもの作成したこいのぼりを持参して行ったワークショップのように、「みんぱく」などモノの貸し出しに加えて、場合によっては人材も一緒に来てくれるような企画も有効ではないだろうか。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真9 日本の問題点と夢を描いたこいのぼり作成中

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真10 特別展でアフリカの民族衣装を試着

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真11 特別展でアフリカの打楽器を楽しむ

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真12 日本とケニアで作成したこいのぼりを展示した学園祭

2.4「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし—」

この特別展は、私自身がこれまで特に関心をもっていたテーマでもあり、初めて授業のカリキュラムに取り入れることにもなった。授業の準備もあって、生徒との見学の前にあらかじめ特別展を見学し、庄司先生の友の会講演に参加することで、展示の意図をより良く知ることができた。またこの日、展示を企画してきた庄司先生や陳さん、城田さんとの懇談の場もあって、その後につながる良い出会いとなった。

生徒との企画展の見学は、4月のカポエラ実演（写真13）やFMわいわいのポルトガル語の放送がある日を選んだ。お昼は、売店で販売していた韓国などのカップラーメンを食べ、午後には展示を企画作成したりリアンさんから、ブラジル展示について詳しく解説を聞くことができた（写真14）。

夏休みには、滋賀県のブラジル専門店を生徒と訪ねた。下見で訪ねた時は平日で閑散としていたが、生徒と訪ねた日曜日にはブラジル人と思われるお客さんも次々訪れ活気があったし、鳥肉の丸焼きなど商品も豊富だった。私たちは、店員さんの手が空くまで長居して、誕生日会に定番のココナッツ飴の包み方やプリガデーロの材料を教わった。このお店のことやプリガデーロの作り方は学園祭でも紹介している。

2004年の学園祭のテーマは「Let's go to Brazil」にした。特別展の展示に習って、自分たちでブラジル誕生日を再現しようとダンボールで作り始めるが、思うように作れない。そこで、展示物の貸し出しの可能性についてリアンさんと庄司先生に尋ねたところ、心よく貸してもらえることになった。背景にあるブラジルで人気のキャラクターを描いた絵は、生徒の一人が博物館の展示を真似て作成してくれたし、誕生日グッズも一緒に届いてとてもにぎやかな展示となった。（写真15・16）。

Rights were not granted to include
this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

写真13 特別展で見学したカポエラ実演

Rights were not granted to include
this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

写真14 特別展でリリアンさんからブラジル展示の解説を受ける

Rights were not granted to include
this image in electronic media.
Please refer to the printed journal.

写真15 ブラジルの誕生会を再現した学園祭の展示 1

Rights were not granted to include
this image in electronic media. Please
refer to the printed journal.

写真16 ブラジルの誕生日会を再現した学園祭の展示 2

3 民博での学びが発展したときの条件

課外活動のひとつとして見学した巡回展や特別展などが、その後発展していくのはどのような条件があったときなのかを考え、以下のように整理してみた。

3.1 展示について予習できたとき

私自身が「弁当からミックスプレートへ」の事前説明会や「多みんぞくニホン」の友の会講演会に参加した時のように、あらかじめ展示の意図や全体像を知ることがその後の展開におおいに役立つ。生徒たちと訪ねた時、博物館で何を学んだかをその日その場で表現させたい時に、どんな課題が出せるのかを考えておくことができる。さらに「弁当からミックスプレートへ」の時は、学んだことをその場で発表できる場所を、博物館スタッフから提供してもらえたこともとても良かった。

また、「2002年ソウルスタイル」の時のように生徒とともに初めて訪ねて、これを予習がわりにして、2回目の訪問の時に課題に取り組むということも考えられる。

3.2 展示そのものを楽しんだとき

展示が、様々な感覚をフルに使って味わえるようになっているとき、その印象は生徒の中に強烈に残る。例えば「弁当からミックスプレートへ」の時ははなはなウェアの試着やミックスプレートを食べたこと、「2002年ソウルスタイル」の時のように李さんの家に入りたくさんの展示物に触れたこと、「西アフリカ おはなし村」で民族衣装を試着したり、楽器を鳴らしたりしたことなど、体験型の工夫は欠かせない。

また、展示会場で博物館スタッフやボランティアの人たちと出会うことも展示を楽しむことにつながる。「弁当からミックスプレートへ」の時は、1度目に出会った博物館スタッフに会うことを楽しみに2度目の訪問をしていたし、ボランティアの人にはなはなウェア着せたりしながら、コミュニケーションを楽しんでいた。展示に関わる人々とつながることができた時には、自分たちの展示をつくるためのエネルギーになるし、博物館に何度も足を運んでみたくなる。

3.3 自分たちの展示を自由につくるとき

仕上がりを予測せず、生徒の自由な発想で展示をつくることは大切だと思う。「弁当からミックスプレートへ」を自分たちの展示にすると、テーマにそったキーワードを網羅したレジュメを私が準備して、生徒が調べたいものだけを選んで調べた。そして、私たちの展示を見に来て下さった吉荒さんが分析しているように（中牧編 2002）「自分なりに吸収して自分なりの言葉」にして発表したり、「戦争の問題や強制収容所といった人権問題など大きなテーマに広げない。自分たちが弁当展で学んだことをクローズアップしている。」という生徒の等身大の展示に仕上がった。そして後に気づいたことは、展示の時には現れてこなかった日系人の苦難や先住民の侵略の歴史についても、私の予想以上に生徒の記憶に残っていたことだった。それは新潟での発表の準備のため、展示に関わった生徒に一年たって何が自分に残ったかをアンケートしたときに見えてきた。自分たちの入りたい窓口から、楽しみながら広げていった結果とも言えるだろう。

さらに展示を作成していく過程で、民博の展示物貸し出しなどの支援があるのは有難く、展示をより魅力的なものにした。全米日系人博物館からハワイの商品の体験キットを借りて、生徒のハワイ旅行のお土産の商品パッケージも加え「ローカル文化」を表すことができたし、よく似た日本の商品も展示して日本とのつながりも見取れた。また、工作に苦勞していたブラジルの誕生日のケーキづくりは、博物館からセットを借りることで解決した。韓国の「みんぱく」の貸し出しについては、先述したように、中身を取り出し展示する過程そのものが学習となっていた。

3.4 展示後の評価があったとき

どんな評価にせよ、まず他の人に自分たちのつくった展示を見てもらうことは、作成のときの励みになる。2001年の学園祭「Let's go to Hawaii ～ハワイのローカル文化とハワイアン文化～」では、スタッフとボランティアの人が見に来てくれると聞いて展示作成にも随分力が入っていたし、当日は中学の門衛所まで彼らを迎えに行き、いきいきと自分たちの展示を案内していた様子を覚えている。これがきっかけとなって、新潟県立歴史博物館の巡回展のオープンニングで発表する機会を得て、生徒たちのつくった

展示が再び息を吹きかえしていた。

3.5 社会に学びの場をみつけたとき

博物館の展示がきっかけとなって、自分たちの展示をつくるために現地調査にでかける。例えば「Let's go to Korea」をつくるためにコリアタウンや鶴橋高麗市場を訪れたり、「Let's go to Brazil」をつくるためにブラジル専門店のCIAブラジルを訪れて、そこで働く人たちとのコミュニケーションが生まれる。そして人との出会いから、つぎの活動の原動力が生まれると思う。自分たちの展示をどのようにつくるかということに加えて、そのもっとずっと先に、自分たちの住みたい社会をデザインしていくエネルギーになると思う。博物館の展示をきっかけに現実の社会に視野を広げていくためにも、できるだけ社会に学びの場をみつけていきたい。

おわりに

かるちゃんぶる部の活動の柱のひとつである多様な文化を知るための活動に、国立民族学博物館は今では欠かせない存在になってきている。これからも民博のスタッフを始め様々な人とのつながりを大切にしていきたい。そしてクラブを立ち上げた時の思いにあるように、誰にとっても住みやすい社会を一緒にデザインしていけるように、自分のアイデンティティをしっかりとって、他の人の多様なアイデンティティも尊重できるような人を育む活動を、生徒とともに創っていけたらと思う。

註

- 1) NGO大学は、1987年から関西NGO協議会が毎年9月から翌年2月までの月1回、1泊2日で開いている全6回の連続講座。毎回テーマに合わせた講師の講義のほかに様々なワークショップを取り入れ参加型の学習が進められる。講座のねらいには「市民の国際理解を進め、国際社会がかかえる課題に取り組むNGOの活動に関わる人材を育てること」とある。
- 2) 開発教育セミナーは、1989年から京都の関西セミナーハウスで続けられている研究会。5・7・9・10・11・12月の月1回、1泊2日で開かれる。毎回テーマに合わせた講師を招き、様々なワークショップを取り入れた参加型の学びを行う。この研究会での成果は『新しい開発教育のすすめ方』1995と『新しい開発教育のすすめ方Ⅱ—難民—』2000として古今書院から出版されている。
- 3) フォスタープラン20周年記念事業におけるフォスタープランと京都フォスター・ペアレント会と中学校の三者連携の取り組みを、2003年の8月開発教育協会全国集会で共同発表した。その内容をフォスタープランの奈良崎文乃さんが『「学校」「地域」「NGO」の連携による持続可能な開発教育』として開発教育協会「開発教育49」2004.2.1にまとめている。

文 献

織田雪江

2003 「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人と出会って—」『月刊ミュゼ』56

中牧弘允編

2002 国立民族学博物館調査報告26『日米共催の展示における学習プログラムとボランティア活動』p. 38